

カメラ探訪

ふるさとの心

その7 一本の楠

ふるさとの通信

変わりゆくふるさと

坂崎謙二

集団就職で横浜へ来て、早いものでもう十年たった。楽しいことにつけ、苦しいことにつけ思い出されるのが、生まれ育ったふるさとの山や畑、石ころだらけの道を毎日自転車を通ったあの中学時代のことである。

毎日の生活の中に、私の心の中にいつもふるさとが生きている。苦しい時、淋しい時いつも私の支えになっているのがふるさとである。

この前久しぶりに、会社の夏休みを利用してふるさとへ帰った。

そこで感じたことは、かぶと虫を取ったり、栗拾いをした山が飛行場になり、石ころだらけの道が広いアスファルトの道路になり、村が町に変わっていることであった。

ふるさとはこのように随分変わってしまったけれども、ふるさとの人の心は昔と同じように、ほのぼのとした温かさを感じさせた。

わずか一週間であったが、ふるさとへ帰り、土の匂を嗅ぎ、青空を仰ぎ見ると、仕事の疲れも忘れ、心身が潑刺としてくるのであった。

これからもふるさとと変わっていくであろう。しかし、それによって郷土が発展していくことは私にとってもうれしいことである。

自然は変われども、人の温かさ、郷土の豊かさは、いつまでもそのままであって欲しいと望んでいる一人である。

私は、これからも郷土と共に歩いていきたいと思う。

熊本市 二岡中学校卒
株式会社三上製作所
横浜工場勤務

熊本市の花畑公園にある楠の大木。枯死寸前を市民の願いが通じてか来春は新芽がふくといい。